

晩春期の養鶏メモ

養 鶏 試 験 場

産卵の極度に進んだ春期も5月を迎えれば、そろそろ産卵も下がってくる、これは生理的な面も多分にあるが、飼育管理の如何によってはある程度その低下を防げるのではなからうか。

飼 料

すなわち、春期の産卵最盛期に飼料の量の不足、或は養分の不足がある場合には、鶏は自分の身を削ってでも産卵をするから、このような場合は合理的な飼料を与えた鶏より早く産み疲れ現象があらわれる結果となる。盛産期後の産み疲れの頃に梅雨、酷暑と続いては衰弱する一方で、休産はおろか換羽を始めるものもあるから特に注意したい。気温の上昇と共に、鶏は食欲は減退してくるから栄養に富んだものを不足しないよう予え、飲水は労力の許す範囲で1日数回取り替えて涼しい所においてやるようにする。

管 理

われわれ人間生活に快適な温度があると同様に、鶏にもまた適温がある、この適温を保持することは、発育や産卵を促進するばかりでなく、飼料を最も効率的に利用する結果にもなる。適温を保持するためには外気の温度と舎内の換気とが密接な関係にあり、また湿度とも関係がある。いうまでもなく温度の上昇は、湿度の許容量を増すことになる。産卵について最適な温度は華氏 55 度で、その許容の範囲は 50～80 度といわれている。この温度の範囲を逸脱することは、産卵にとって良い条件とは決していえないが、特に高い温度に昇ることは望ましくない。このほか温度が上昇すると、卵質卵殻が悪くなったり、就巢発現鶏も多くなってくる。白色レグホーン種のように、多産最良されたものではこの性質はほとんど無くなっているが、兼用種や一代雑では就巢性を現わすものがある。就巢する直前はよく産卵するが、就巢中は全く休産するから程度の重いものは年間絶対産卵数が少くなるので早く廃鶏とした方が得策で

ある。就巢性の誘因としては高温、暗黒などがあげられるから鶏舎は明るく換気をよくすることが大切で、これで就巢を軽く終らせることができる。バタリーやケージ飼育では就巢鶏がでないか、できても軽いのはこのためである。従って平飼い飼育でこのような鶏を発見した場合は、明るいバタリーかケージに収容すると早く快復する。

衛 生

鶏舎は今頃消毒するのが適期と思われる。気温の上昇した頃（少くとも梅雨まで）を見計らって清掃消毒したい。時期がおくれると産卵に影響するから、5月上、中旬までには終りたいものである。

晩春期は寄生虫の多い時期で、特にわくも蛔虫の害が大きい。わくもは鶏舎の柱、止り木などの割れ目に隠れ、夜間でて活動する吸血の害がひどく産卵は非常に低下する。これの駆除は最近では有機燐剤を主体としたわくも専門の新薬が市販されていて、これの効果は大きいようである。蛔虫にはフェノチアジン、ピペラジン製剤などが市販されているが、平飼い飼育などでは勿論のこと、ケージやバタリー飼育においても年間3～4回実施することが望ましい。

鶏痘の流行期に備えて予防接種は是非実施すること、予防接種の時期は蚊の発生する3週間前までに終ることが肝腎で、接種する場合の注意点としては①予防薬の有効期限内のものを使用すること。②直射日光の当る場所で接種しないこと。③接種程度はその部位が充血する程度にし、出血させないこと。④接種後4～5日に発痘したか否か確認すること。（発痘が6～7個以上あればよい）などである。

梅雨前後はコクシジウム症の多発する時期である。今年春餌付した雛は相当大きくなっている時期であるが現在では相当優秀な治療薬、予防薬ができて販売されていて大体餌付後3週目頃から適宜これを予防的に使用すればよいが、管理の不都合がコクシジウム症を誘発するから特に平面飼育では常に床を乾燥した状態にしておくこと、なるべく薄飼いにする

岡山畜産便り 1961.04

ことなどの点に気をつけることと、たえず糞の状態を観察すること（急性の場合は血便、慢性の場合は粘液便又は糞に異常がないこともある）が大切である。又夜間中雛以後はなるべく止り木に就かせて床面に直接雛を寝させないようにするため 50 日前後から床上 30 センチメートル程度の低い止り木を作ってやることと、夜間の冷え込みに注意すること。